

滞在型市民農園を 取り巻く地域活動

～二地域住民同士の交流・移住に向けて～



滞在型市民農園の取材に至るまで

私は、実家が首都圏にあることも手伝ってか、都会を離れた暮らしへの憧れがあります。しかし、四〇歳の私にとって、移住は目の前に迫ったテーマではありませんでした。私が「滞在型市民農園」の存在を知ったのは田舎暮らし関連の雑誌記事だったと思います。

滞在型市民農園は、一年以上数年単位で小屋付きの農園を借りて利用できる、という農園で、我が国で五十箇所以上設置されています。

この農園を利用し、都市生活者が農村に一年を通じて宿泊を伴い頻繁に滞在できるようになります。

このため、農村と都市という二地域の住民同士の交流が活発になり、農村への移住も促進される効果があるのでは、と思いました。

こうして、移住でもなく、都会の中の市民農園でもない、この滞在型市民農園に対して、取材への興味が沸きました。

宮城県庁、丸森町役場を訪問

まずは、東北唯一の滞在型市民農園がある宮城県丸森町を訪ねることにし、それに先立ち宮城県庁にお伺いしました。

宮城県庁におけるインタビュー

●宮城県企画部地域振興課
地域振興第二班 主事・鈴木智弥さん



——宮城県の滞在型市民農園についてお聞かせください。

はい。東北で初めての滞在型

市民農園として、まず丸森町不動尊に、その後筆甫^{ひつぽ}に設立されました。もし今後、同種の農園が東北の他県にできれば、情報や意見の交換がより活発にできると思います。

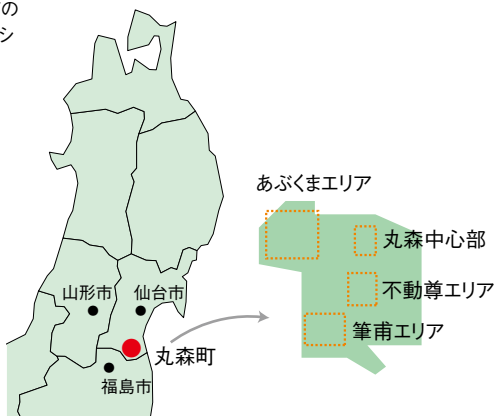
——移住や二地域交流の推進の取組についてお聞かせください。

「移住・交流推進事業」の一環として、各市町村同士の交流・情報発信を目的に「みやぎ移住・交流推進研究会」を平成二二年七月より立ち上げ、農作業ボランティアの実施など、グリーンツーリズムや移住推進に向けての活動の情報交換をしています。こうした活動が実現していくと、移住が促進されると思います。

丸森町は、宮城県最南端に位置し、年間の平均気温が一二・五℃、夏は日中暑くても夕方以降は涼しく感じられます。冬の積雪もそれ程でもなく、東



宮城県丸森町の分譲地のチラシ



不動尊クラインガルテンに隣接する分譲地

北地方では比較的温暖です。

宮城県丸森町におけるインタビュー

● 農村整備班班長・大石勝さん

「不動尊」

「筆甫」の両市民農園はどのような存在ですか。

都市と農村の交流を通じて、活力ある農業や農村地域づくりを進めるための中核施設です。一区画面積は約三〇〇㎡、農地面積は約一五〇㎡、休憩施設は不動尊が四三・〇六㎡（車椅子対応施設が四六・七九㎡）、筆甫が五〇・九九㎡あります。年間利用料は三六万円（光熱水費別途）となっています。

設立の経緯とその時期は。

不動尊、筆甫ともに国や県の助成も受け、それぞれ平成一二年度及び平成一七年度から開園しています。

両農園を通じての移住、交流の現状を教えてください。

利用者のうち、不動尊で四名、筆甫で一名、町内に移住済です。また利用者には、年間一〇〇日前後の十分な利用頻度があります。利用者の居住地域は県内、首都圏も含めた県外と多岐にわたります。



「筆甫」の両市民農園はどのような存在ですか。

都市と農村の交流を通じて、

● 宮城県丸森町建設課課長補佐 門間傳さん

町内には分譲地があるそうですね。

滞在型市民農園の利用者の利用後の定住も視野に入れて、不動尊の農園の隣接地に分譲地を販売中です。

現在二〇区画中九区画が販売済みですが、完売に向けて平成二二年七月より町役場内にプロジェクトチームを立ち上げ、家庭菜園サポート体制構築（農機具貸出、技術指導等）、補助金（定住支援補助金等）制度、などの販売戦略を策定して順次実行に移しています。

分譲地の生活利便性について教えてください。

駅、学校は五キロ前後です。病院や買い物に便利とは言えませんが、近隣に自然公園や日帰り入浴可能な国民宿舎あぶくま荘があります。

購入者はどのような方ですか。

隣町の市街地在住者が週末居住用として、仙台近郊の団塊の世代の方が退職後居住用として、近隣に職場のある自然派志向の方が居住用として、などです。

移住にあたってのネックは。

毎年東京でセミナーを開催しており、昨年も三五組が来訪されましたが、成約に至りませんでした。近隣に新たな仕事になかなか探せず、既に仕事がある方に限定されるということがネック



第一農園に囲まれた管理棟と広場



不動尊公園

不動尊クラインガルテンは、町の観光・イベントの中心となる広場やキャンプ場、公園と隣接しており、管理棟を囲んで配置される第一農園、及び数百メートル離れた第二農園からなります。

取材当日は、翌日の「ヤーコン祭り」のため、祭りのプロジェクト会員の方々が、テント設営など準備の最中でした。

不動尊クラインガルテンを訪問

かもしれませんね。



第二農園



第一農園

日	記	日	記
16	野	17	水
17	水	18	木
18	木	19	金
19	金	20	土
20	土	21	日
21	日	22	月
22	月	23	火
23	火	24	水
24	水	25	木
25	木	26	金
26	金	27	土
27	土	28	日
28	日	29	月
29	月	30	火
30	火	31	水

管理棟の月間予定表

全一八棟中、県内九名、県外九名（東京二、神奈川三、埼玉二、千葉一、福

島二）です。県外の方は、一旦来ると一週間以上滞在したり、比較的手のからないさつまいもや花を植える方もいます。頻繁な手入れが必要なキュウリ、ナスなどは、近隣の利用者や組合員に「大きくなったら取って食べて」などと言って家路につく方もいて、皆さん思い思いに過ごされています。



丸森町不動尊市民農園管理組合
常駐管理者 組合長 池田義弥さん

管理体制について教えてください。
三六五日（大晦日や正月も含む）、常駐管理

●利用者…渡邊さん
渡邊さんは会社を六〇歳で定年退職後、お住まいの仙台市から丸森町まで通い始めて二年目。農作業は全くの未

第一農園に続き、第二農園をご案内頂きました。第二農園は紅葉にも囲まれ、より閑静な印象です。
組合長のご紹介で利用者にお話を伺うことができました。

興味のある方はぜひ一度いらしてください。

野菜作りは難しく、奥が深いです。でも、自分で種を蒔いて、手入れして収穫し、最後まで自分で作り上げるのは楽しい。まだ一年目ですが、利用者でその後、丸森に古民家を買って生活を始めている人が四名いることが、丸森が良いところであることの証です。

（組合長曰く、渡邊さんの野菜はできが良いそうです）

野菜の種類も大変多いですね。人参、大根、インゲン、ししとう、パプリカ、ヤーコン、水菜、など、少量ずつ作っています。滞在型の場合、

最初はどのように始められたのですか。

買ってきた本を見ながら、とかですね。組合長にもアドバイスを受けたりました。



経験、滞在型市民農園利用も初めてでしたが、奥様と一緒に農作業にチャレンジされているそうです。



パプリカ



ヤーコン



美しく整備された畑

日帰り農園と比較して広い面積を耕せます。宿泊すれば、朝から作業ができますから。

——利用していかがですか。

特に朝、農作業をしながら眺める周りの紅葉した林の風景はきれいですよ。

●利用者：佐藤さん



佐藤さんも、農業に縁の無い生活を送りながら神奈川県相模原市にて事業会社を定年退職。

その後茨城県内に住を経て、現在神奈川県川崎市に在住、こちらに訪問し始めて二年目、現在七〇歳になられます。

——ご自宅が比較的遠いと思いますが、こちらへの訪問頻度はどの程度ですか。

季節の良い時には一度来ると一ヶ月程滞在、その後数週間川崎に戻り、また来る、といった頻度です。

——畑の周りや玄関付近には花も植えられていてきれいですね。

川崎に戻っている間は、丸森のことが結構気になりますね。丸森に来てきれいにすると落ち着きます。

（組合長曰く、佐藤さんには、花を共用スペースに植えるのにも協力して頂いている、とのことでした）

筆甫クラインガルテンを訪問

丸森町役場の産業観光課農村整備班の目黒淳一さんにご案内頂き、不動尊地区から車で一〇分程南に向かうと、美しい沢沿いに七つの集落（区）がある人口約八二〇名、戸数で約三二〇件の筆甫地区に着きました。

●筆甫体験農園管理組合

組合長 酒井長夫さん



——筆甫の特徴を教えてください。

不動尊よりも三〇〇m程標高が高いので、気

温は三℃位違います。雪も一シーズンに約三〇cm積もることが三回位ありますが、夏は涼しく過ごし易いです。

——組合員・利用者の方も大変アットホームな印象ですね。

ここはひな壇型の土地が三段あり、中段に管理棟、上段に四棟、下段に四棟の配置となっています。平屋が四棟並び、お互いの顔が見え易い構成です。

また、一年を通じて筆甫の農園独自のイベントが多くあり、利用者に対して親身に対応しています。

——組合の規模について教えてください。

当初一五人で、現在一二名で組織しています。

——本業に加えての組合活動は大変ですよね。

筆甫地区には組合が約五〇あって、たいいていの方は一人で三〜四つの組合に入られています。例えば、そばを育て収穫しそば屋も運営する「そば組合」、直売所で農作物を販売する「直売所組合」など。その一つが筆甫体験農園管理組合、という位置づけで、地区に根



管理棟



平屋4棟が並ぶ様子



目黒忠七さん



目黒宗司さん



引地武男さん



利用者と組合員の皆様で芋煮会

ざした活動の一つになっています。

——日頃の管理体制について教えてください。

毎日朝晩必ず組合員が交代で来て、郵便物・ファックスなどの確認をします。また共用施設や全体の出入口等フェンスの開放をします。但し畑を荒らす猪や防犯対策上、夕方は施錠します。日中は、事前予約を受けた見学者の訪問を受けたり、利用者からの要請、取材など柔軟に対応しています。また、共用施設の通年管理には組合員が分担してあたっています。

契約、規約（使用心得）は先にできた不動産と同じですが、活動実態には

それぞれ一定の特色があります。

——活動実態について教えてください。

定例としては、毎年四月以降、新しい方が入って落ち着いた頃に催す歓迎会をはじめ、山登り、新年会などがあります。その他、椎茸の原木菌床づくりや、田んぼの作業などへの参加を任意で募って活動しています。

——運営にあたっての収支はどのようなになっていますか。

各棟からの利用料だけが基本的な収入です。一方、支出としての人件費は、例えば朝夕だけ来て、先程の決まった作業をする場合は一日につき一時間分の時給一〇〇〇円、他もイベントや作業に従事する場合、一時間当たり一〇〇〇円に換算して支給する、という明朗な運営をしています。但し実際には、除雪や収穫の作業時など、各々の組合員が私物の高価な機材を持ち出して無償で使用に供することもあります。

——今後の運営にあたっての抱負をお聞かせください。

今後は、この環境を求めて来る利用者の思いに答えられるような運営をしたいです。ハード面の維持・整備や、環境にマッチした共用設備の充実、例えば薪ストーブとかを管理棟に設置できればと考えています。

毎年一月から募集を始めますが、見

学時には春夏秋の季節が想像し辛いのか、新年度になってようやく利用者が全員決まるという年もあります。興味のある方はお問い合わせください。

敷地内の共用部分も、組合員が年三回草刈りをするなど、整備が行き届いています。組合員の方に利用者の方をご紹介頂き、お話を伺いました。一部の利用者で希望される方の棟の軒先に、組合員の方が柿を干すための竹組みの作業をされていました。

●利用者・阿部さん

——お住まいはどちらですか。どのような利用をされていますか。



仙台在住で、（農業や自然に関係の無い）現職中の五六歳で



希望者の棟の軒先に順に竹組み中



す。大体金曜日の夜中九時過ぎに夫婦で移動しこちらに着き、土曜朝から活動します。日曜の昼頃に仙台の家に帰ります。

——利用して良かったと思うことは。

近隣の自然豊かな中で娘夫婦と孫を遊ばせたり、さつまいもを収穫したりできます。田んぼで絶滅危惧種の「アカハライモリ」も見られますよ。

●利用者…大橋さん



——お住まいはどちらですか。
今年からご利用のことですが。

今年五月二〇日から利用開始

しました。仙台在住の元教員です。

——菜園作りのご経験はありますか。

現職中は多忙で、菜園は全くの初心者だったのですが、元々あったサンチュ苗の種ができて、土にこぼれていたのを植え直したりしながら、見よう見まねでこんなにたくさん収穫できました(笑)。他にもさつまいも、タマネギの苗を先輩の利用者から頂くなど、周りの方に助けて頂き立派な菜園に仕上がっています。

●利用者…佐々木さん

——今は何の作業をされているのです



か。

イチゴです。剪定したり、植え替えたり、雑草を取ったりですね。春先以降に収穫できるので作業はこれからですが、楽しみです。

(農作物の出来で組合員や他の利用者から評判の高い、ベテランの佐々木さんです)

クラインガルテン栗源くりもとを訪問

次に、都心部に比較的近いことから、移住よりもむしろ二地域交流が盛んなのでは、と思われる滞在型市民農園の運営の実態を知りたいと思い、千葉県香取市にあるクラインガルテン栗源を訪問しました。

香取市栗源区事務所まちづくり課産業振興班の秋葉伸明班長に、以下のお話と現地のご案内を頂きました。

クラインガルテン栗源は、千葉県栗源町(当時、現香取市)が事業主体となり開設、有限会社紅小町の郷(道の駅運営会社)への運営委託により平成一八年四月から利用開始されました。都市農村交流の拠点施設である「道の駅くりもと」を更に充実・活性化させるため、日帰り型貸し農園(平成一六年

に特区計画を政府が認定)の発展型として構想されたものです。

有限会社紅小町の郷の農園部が、クラインガルテン栗源や日帰り農園(取材時点で空き有)、体験農園などの各農園運営に直接携わっています。ご担当の越川さんにお話を伺いました。

●各農園担当 越川さん



——日々のクラインガルテン栗源の運営では、どのような業務があるのですか。

肥料や農機具の点検・修理等や、日常のトラブルを含む諸々の相談対応です。また、年間を通じての各種イベント、交流会を主催しています。

——利用者が、農作業や利用上の疑問・質問や相談をしたい場合、どのよ



道の駅で販売する「ベニコマチ」



ベニコマチ色の旧栗源町役場。



日帰り農園の様子（取材時点で空き有）



菜園以外に芝生スペース有



建物は整然かつスタイリッシュな印象



車は各棟への進入路にはあえて入れない設計



幹線道路から奥まった静かな環境

●クライガルテン栗源の概要

- ・個別設備：20区画（310㎡／一区画）。ラウベ（小屋）約35㎡（エアコン付）。畑110㎡、軒先の芝生地を含む緑地165㎡。
- ・共同利用施設など
ピロティ、管理人室、堆肥置場、作物残さ置場、農機具置場、トイレ、駐車場等
- ・利用料金：400,000円／年（光熱費別）、共益費48,000円／年（ラウベ水道料金、農具、肥料等）
- ・利用者内訳：千葉県内14組、県外6組（東京、神奈川、埼玉、茨城）

うにしていますか。

日中は私にまず連絡を頂くことが多いです。地元の農業従事者で、助言や指導を行う「インストラクター」と利用者の仲介役となります。その後、すぐ連絡のつく方や、内容によっては最適な方を選んでいきます。

—— 有限会社と、香取市との運営や施設の整備等の棲み分けは、どのようになっていますか。

建物、農具等のハード面は、市から供給、メンテナンスされています。ラニングコストである肥料代・水道代などは、共益費から購入支払等の手続きを有限会社が行っています。

—— 年間を通じてのイベント、交流会にはどのようなものがあるのですか

春先には新入利用者との交流会、夏にも交流会、一月には、日帰り型市民農園とクライガルテン栗源の双方の利用者同士の交流会などがあります。

—— 運営上、特に大変だな、と思うのはどのような時ですか。

クライガルテン栗源利用者の方々は、本格的に農作業をやるという方々で、良い意味で運営側も安心してお付き合い

いできるという印象です。ただ、折角イベントを催しても、一部の方から「都会から静かな所に来てまで、わざわざ騒々しい席に出るのは…」という声も聞きますので、結果的にイベント参加者が限定される傾向はある、と思います。

クライガルテン栗源は、ハード・ソフト両面における充実度合いに加え、首都圏から最も交通至便な立地という条件も相まって、現在も入居待機者が三〇組の盛況振りです。

取材を振り返って

丸森町では、移住者増に向けてNPOを通じて取組む吉澤さんを含めた多くの方々による活動、都心に比較的近い地理的条件の香取市では、二地域住民同士の交流を主軸に据えての、有限会社による組織的な運営の実現、という、それぞれの特色を取材することができました。また、滞在型市民農園に造詣が深い東正則さんからの貴重な御寄稿を頂きました。

これらの取材を通じて、今回の取材先以外にも、全国に様々な取組があることは間違いないのだから、我が国における移住や二地域間の住民同士の交流は、今後より一層進んでいくだろう、ということが確信できました。

（協会職員／別府新一郎）

Column

そろそろ自分らしい 生き方の場を探しに行こう ～滞在型市民農園のすすめ～

工学院大学工学部建築学科教授 東 正則さん



産業構造の変化に伴い今や大部分の国民が都市に居住するようになり、自然が失われたコンクリートジャングルの中で、土から離れて人工的な環境の中で過ごしている。なかには累代都市生活者であり、田舎のない人も大勢いる。しかし、自然の恵みやおそれを知らない生活に疑問を感じている人も少なからずいる。このような疑問を感じながらも、どのようにしてこれを実現するか手がかりをつかめずにいる人も多いと思われる。

とりあえずは、都市の利便性を享受しながら土に触れる試みとして、市民農園を利用している人も多いであろう。ドイツでは「クラインガルテン」という日本の市民農園に似た緑地が市街地にある。イギリスには「アロットメントガーデン」といわれる農園がある。ヨーロッパには各地で市街地のなかに、このような農園が用意されている。クラインガルテンは1区画300㎡ほどあり果樹や花卉栽培も可能で、宿泊はできないがラウベという休憩小屋が付いているのが普通である。日本の市民農園は、あくまで農家の農地を借りて開園しているものであり、いずれ返却するのが前提になっているので、1年単位の農園利用が原則になっている。これらはあくまで日常生活の延長上に存在するものである。

しかし近年市民農園に関する法律の整備等により、数年の長期にわたって利用できる休憩小屋が付いた市民農園が「滞在型市民農園」として、農村地帯に多く開設されるようになってきた。多くは山間部の農村で荒廃農地の活用策として、また農村の活性化策として、より濃密な農業体験ができるようにキッチン、バス、トイレ付きの宿泊可能な休憩小屋が付いている。これは農村社会から切断された農園付き貸別荘ではなく、あくまで農業体験が主であり、じっくりと農村のなかで農業の体験をし、地域の活性化に寄与して貰うのが開設目的である。農業体験を通して都市生活から離れて、非日常の生活を体験できるのが、都市にある市民農園との違いである。

都市生活から離れて非日常の世界に入り込むためには、ある程度の時間距離が必要で、都市から2時間以上高速道路を走り、インターチェンジから更に半時間ほど田舎道を走って辿り着くような、一見不便なような場所が人気が高い。ロケーションも重要で、高台で優れた農村景観が一望できる場所、緑豊かな山に囲まれた谷間、名山や湖沼、海、河川等が望める場所も人気が高い。休憩小屋も都市風のミニハウスではなく、ログハウスなどの田舎風の休憩小屋が人気が高い。

より深く農業や農村の体験をするためには、近くの農村社会及び農家との交流が不可欠である。いずれの滞在型市民農園でも、このような交流を重視し、例えばバーベキュー大会、ソバ打ち、田舎料理、機織りなどの交流の機会を設けている。なかには「田舎の親戚制度」と称して、特定の農家と提携して、農業指導その他の交流が生まれるように配慮しているものもある。個人的に特定の農家と親しくなり、果樹栽培、椎茸栽培等を体験している人もいる。

まずは都会生活の気分転換を図るためにも、もう一度自分の生き方を振り返ってみるためにも、将来の生活の場を考えるためにも、とりあえず滞在型市民農園を利用してみてはいかがであろうか。いきなり田舎暮らしの場を求めて行くのではなく、滞在型市民農園で慣習や気候風土等を理解してから定住する方が無難であろう。事実、滞在型市民農園を利用して、その地域へ定住する例も多くある。都市からの定住策を用意している自治体の滞在型市民農園を選択するのもひとつの方法であろう。

最近の問題として、高齢者の長期滞在利用者が増えているが、滞在型市民農園は都市老人の隠居部屋ではないので、都市の高齢者問題を滞在型市民農園で解決しようとするような利用は控えるべきであろう。

全国各地の滞在型市民農園を紹介したものとして、「滞在型市民農園をゆく―都市農村交流の私的検証―」（農林統計出版）があるので、参考にしていきたい。

Column

中山間地域活性化のための “移住の取組”

筆甫まちづくりセンター指定管理者・筆甫地区振興連絡協議会事務局長
NPO法人ひっぽUターンネット事務局長

吉澤 武志さん



——日頃のご活動、たいへんお疲れさまです。最初の新住民の移住年は、平成7年3月とお伺いしましたが、ご活動はこの頃から開始したのでしょうか。

「ひっぽUターンネット」はNPO法人として平成22年に認定されましたが、団体としては平成15年（地元住民7名と新住民3名）に設立しました。これ以前の移住は、少子高齢化や過疎化を憂いた筆甫地区の有志の方々が、活動なさったことによるものですが、その有志のほとんどの方々が今のひっぽUターンネットの地元のメンバーです。現在は設立当初よりも少しづつ会員も増加し、地元住民9名、新住民12名の計21名で活動しています。

——活動を開始された経緯、開始当時のご苦労なさったお話をお聞かせください。

私自身もひっぽUターンネットと関わりを持ち丸森町に移住した一人なのですが、あるNGOのインターンとして、タイの農村地域に平成14年6月から1年間赴き地元住民と生活を共にした経験から、日本の中山間地域の地域活性化活動の重要性を感じ、中山間地に移住先を探していたところこの筆甫地区に出会いました。ちょうど移住先を探しているのと同様に、ひっぽUターンネットが設立されたので私が会としての受入1号ということになっています。

この筆甫地区を選んだのは、地域活性化に当時から熱心に取り組む地元住民の方々と接し、このような地域を考える方々と一緒に活動したいと思ったことが大きかったです。

——新住民による筆甫地区の人口増減の実態を教えてください。

筆甫地区の現在の人口は820名程ですが、毎年20名程減少しています。一方新住民は20歳代、30歳代、40歳代を中心に年間数名増加しています。

——筆甫地区への移住希望者からの相談を受けたり、空き家紹介などを行っているそうですが、そもそも移住希望者をどのように見つけ出し、接触しているのでしょうか。

ホームページ、ブログ、田舎暮らし体験ツアーの実施や、丸森町に問い合わせのあったものが当会に連絡が来るといった形などがあります。ホームページやブログは、あまり更新は頻繁ではなく反省するところですが、常時発信できるという点では移住希望者が連絡を寄せる重要なツールになっています。また既に移住している方を通じての紹介も多く、こちらが移住希望者と巡り合う活動の中心になってきています。

——20代から50代と比較的若い世代が新住民と移住しているのには、活動上心がけていることがあるのでしょうか。

過疎化の進む地域ですので、どうしても担い手としての若い世代・子育て世代の移住を地域や我々NPOが応援するという姿勢が奏功していると思います。また、筆甫地区は中心部まで距離があるため病院や買い物も比較的不便なこと、年配の方々が敬遠する、という事情もあるのかもしれない。

——「田舎暮らし体験ツアー」の活動内容について詳しく教えてください。

平成22年度は9月5日に開催しました。<http://hippoui.web.fc2.com/index.htm>に詳細が掲載されていますが、既に生活している移住者の暮らしぶりが見学できますので、参加者には移住後のイメージを描いて頂きやすいと思います。参加人数は約20名ですが、運営側も、会員、ご協力頂く移住者や地元の方々を合わせ20名以上の規模で迎え入れます。

来年には、この田舎暮らし体験ツアーに参加したご夫婦が移住することもほぼ決まっています。

——地区の担い手として、今までの地区住民で担ってきた活動を新住

民が行って来ているそうですが、新住民に行わせてもらえないような活動はありますか。

地区住民が担ってきたものを、新住民が同様にすることは増えてきています。特別に行わせてもらえないような活動というのは特にはないと思っています。逆に、日中地元に残って生活している移住者は、地元の消防団などでは担い手となっている場合も多く、移住者の参加無しには地域活動が成り立たないことも出てきています。

——ひっぽUターンネットの会員に、新住民は増えているが地元住民の増加は見られない、というのはなぜでしょうか。

当初から参加している地元住民が中心となって活動を続けて頂いているので、地元住民の会員増の必要性が低い、というのが実情です。会員ではないが、イベントなどへの協力は惜しまないよ、とおっしゃる地元住民は増えており、心強く思っています。

——地元住民との関わり、活動全般に関して大変だったというエピソードなどがあれば教えてください。

当時も今も大変なことの一つは、移住希望の方への貸家の確保です。貸家物件では、大家との交渉を重ね、いよいよ貸してくださる、という時期に大家から断りの連絡が入ったことから、大家に聞いたところ「近しい人から『貸すべきでない、一旦貸したら後で大変だ』などと言われた」ということもありました。しかし、地域に溶け込む移住者が増えるにつれて、貸家として提供可能な家の情報提供など、地域住民の協力が徐々に得られるようになってきています。

ほかにも、移住者にとっては自分が暮らしてきたような都会とは違い色々戸惑うこともあるようです。ちょっとした価値観の違いで住民とちょっとしたすれ違いが起きてしまうこともあるのですが、ひっぽUターンネットとして間に入り、フォローをすることもあります。

——ひっぽUターンネットの活動の趣旨を理解してもらうために、どのような活動を行っていますか。

そうした特別な活動はありません。実際に移住者一人一人が地域の中に溶け込んでいくことで様々な面で地元住民の方から理解されることで、活動趣旨が自ずと徐々に浸透していくのだと思います。ひっぽUターンネットとしても移住した人には必ず一番近くのご近所さんとの関係を何より大切にするように話をしています。そうすることで少しずつ理解者・協力者は増えていくのだと思っています。

●筆甫地区における新住民の移住状況

年齢（移住時）	移住年	職業	家族数（移住時）	前住所
40代（20代）	平成7年3月	農業	6（4）	東京
40代（30代）	平成11年11月	農業	2	東京
40代（30代）	平成14年3月	農業	6（4）	大阪
30代（20代）	平成16年4月	ほか	4（2）	仙台
30代	平成18年6月	自営業	2	角田
20代	平成19年4月	自営業	1	東京
20代	平成19年8月	自営業	3（1）	仙台
50代	平成19年9月	ほか	1	仙台
40代	平成20年3月	ほか	7（5）	仙台
40代	平成20年5月	自営業	1	神奈川
30代	平成21年6月	自営業	1	仙台
30代	平成22年3月	農業	1	仙台
計			35（16）	